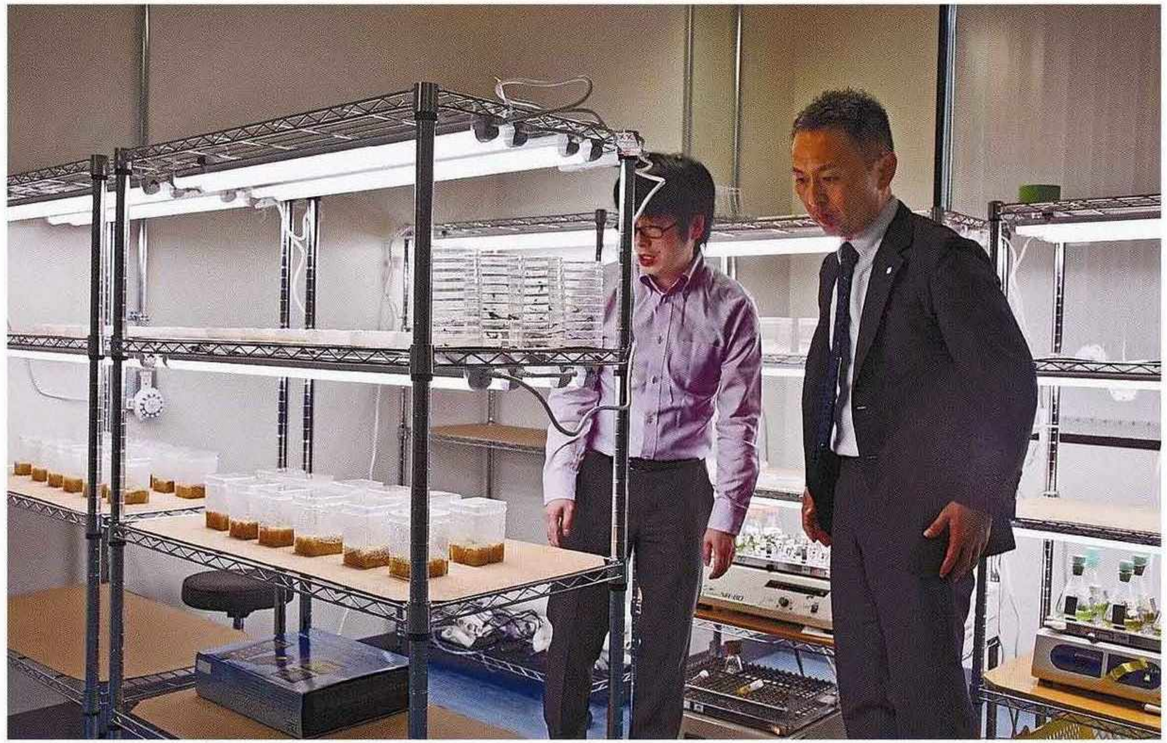
研究所が活動を行う北見工大内に設けられた研究室



牛の尿から土壌改良剤　「環境大善」

大学院や企業の成果活用

研究所設立、北見工大と協力

牛の尿を原料とした土壌改良剤や消臭剤を製造販売する「環境大善」（北見、窪之内誠社長）は、大学や企業との共同研究を円滑に進めるための研究組織「土、水、空気研究所」を設立した。大学院で学んだ専門知識を持つ社員らを配置して製品の品質向上につなげるほか、研究職の職場を北見に作ることで地域の製造業全体の活性化も目指す。

「研究所」は同社の一部署とし、6月に同社が北見工業大学と共同講座を開設した際に学内に設けた専用の研究室で主に活動する。まずは、同社の製品に使用している牛の尿を発酵させて作るバイオ活性液の詳細な分析を進める予定だ。研究員の採用は今後、強化する。

同大で微生物学を学び、環境大善に入社した加藤勇太さん(28)が、引き続き博士課程に在学しつつ研究を主導する。加藤さんは「微生物学や生物学にとどまらず、さまざまな分野の専門家に仲間に加わってほしい」と話す。

同社の役員で、研究所の工藤公太副所長によると、北見工大の卒業生がオホーツクで研究職に携わるには、公的機関に就職するのがほとんどだったという。工藤副所長は「研究所を通じて専門知識を持つ学生を北見にとどめることで、地域の産業育成にもつなげたい」と期待する。（樋口雄大）

©北海道新聞社